

最終報告書レポート

プロジェクト「タイ・フィルムアーカイブにおける 20 世紀前半のタイ映画調査」の活動成果報告

1. 活動概要

(写真 1)

タイ・フィルムアーカイブに保存されている 20 世紀前半のタイ映画に関する調査を行なった。

調査の着目点は以下の 2 点である。

- ① 日本において未紹介で、日本人に紹介すべき往年のタイ映画の名作の調査。
- ② 20 世紀前半のタイ映画で、何らかのかたちで日本に関係する映画の調査。

①に関しては、タイ・フィルムアーカイブ発行の『タイ国フィルモグラフィ第一巻』（1927～1956 年作品収録）に掲載されている全 500 余りの映画作品を調査した。ただし、この巻に関しては、フィルムアーカイブに実際に保管されている作品は極めて少数であった。アーカイブ以外の保存先にも当たったが、残存フィルムの発見される可能性は現在のところ低い（今後、「サンティ・ウィナー」 Santi-Vina (1954) のようにタイ国外で保存されているのが偶然発見される可能性は残されている）。

当館において実際にアクセスし視聴できた全作品の概要を整理したリストを現在作成中であり、今後発表していく予定である。

②に関しては、タイにおいて何らかのかたちで日本と関係する映画やドキュメンタリーなどについての情報を収集した。日本の「弁士」スタイルを用いたといわれる西洋映画「マダム・バタフライ」の原版調査を行ったが、アーカイブ内外を含めて所在の詳細は不明であった。「マダム・バタフライ」のタイ翻案作品を原作とするタイ映画が複数回制作されているが、断片的に残っている関連映像を入手した。その他、戦前に日本が制作したタイ国に関するドキュメンタリー「クローン・チャーン」（邦題「象狩り」）や逆にタイ人クルーが戦前に日本で撮影した貴重なドキュメンタリー作品をアーカイブにおいて確認・視聴することができた。

以下調査内容の詳細を記していきたい。

・上述したように今回の調査は、タイ・フィルムアーカイブ発行の『タイ国フィルモグラフィ第一巻』 ภาพยนตร์ตามุกรมแห่งชาติ ฉบับที่ ๑ พ.ศ. ๒๔๗๐ - ๒๕๐๑ (2014) をもとにして行った。同書には 1927～1956 年にタイ国内で劇場公開された映画作品情報が掲載されている。公開された情報の断片が一切残っていないものは、当然ながらたとえ上映されていても収録されていない。

現在確認できているタイ映画史における最初の劇場公開映画、すなわち本書の嚆矢を飾る作品は 1927 年の「โชคสองชั้น (二重の幸運)」 (英題: Double Luck) である。パッターナーコーン劇場で上映。16 ミリ、白黒サイレント。当館で保管されているのは 1,25 分のみ断片で、デジタルデータ化して DVD 保存されているものである (ユーチューブにもあげられているので視聴可: 11 月 1 日現在)。

タイ語タイトルの意味も「二重の幸運」で、主人公の私服刑事が最後に犯人逮捕とともにヒロインをも獲得するためである。当時タイで流行っていたシャーロック・ホームズやルパンシリーズ翻訳本との影響関係を研究してみるのも興味深いであろう。

現在アーカイブに保管されていて一般の者にとってアクセス可能な作品は、DVD にデータ化したものであり、その元になっているオリジナルフィルムの有無を、筆者は複数の係員に確認したものの、所在は不明とのことであった。ある担当者によれば、古い映画に関しては、当館は概ねどこからか借用するなどしてデータ化保存し、例外を除き原版フィルムは返却しているはずなので所有してないとのことであった。それほど古い映画でなければ原版フィルムが存在しているも



(写真 2)



のもあるので、一度保管室に入り詳細な調査を行いたいと考えたが、フィルム保存の専門家以外は立ち入ることはできないので、筆者が実際に確認作業を行うことはできなかった。今後専門家の詳細な調査を期待したい。

1927～1956年間の劇場公開映画でアーカイブがデータ保存している作品は多くはなかったが、所蔵していない作品を含めた当該期の映画の全体的な傾向を考察すると、兵士もの（なぜか水兵ものが多い）、文学作品をもとにした悲恋もの、著名な伝説をもとにしたもの、怪盗紳士および無頼漢ヒーローものなどが多いことが特徴に挙げられる。現在のタイ映画界で隆盛を極めている「ロマンティック・コメディ」風の作品はみあたらなかった。概ねいずれの作品も音源が存在していないので内容を理解するには困難をとまった。また画像が極端に薄いものや、はげしく揺れる作品もあり、理解の妨げとなった。

以下アーカイブにて視聴可能な作品で、日本向けに紹介したいと筆者が考える注目作品を、いくつかここで紹介しよう。

「พรายตະเคียน (タキアン幽霊)」(英題なし)。1940年。チャールムブリー劇場。35ミリ、白黒。有名な女性幽霊タキアンのドタバタコメディ。特撮や現代的な映像エフェクトなども一切なくシンプルな撮影ではあるが、人々がタキアンに遭遇しておどろく様子などが、サイレントムービー時代特有の雰囲気とマッチして逆に味わいがある。劇場で「弁士」が声をかぶせる形態での上映である。音源は残っていない。8分の作品で、欠落している可能性もある。

「พันท้ายนรสิงห์ (パンターイノラシン)」(英題なし)。1950年。チャールムクラン劇場。16ミリ、カラー。95、53分。画像、音源とも良好。ただし、音源は当時のものでなくかなり後のものと思われる。アユタヤ朝の「虎王」に仕えた伝説上の義臣パンターイノラシンの悲劇を描いている。忠臣が殉死するこのテーマはタイ人に好まれ、近年も映画化・テレビドラマ化されている。

「แผลเก่า (傷あと)」(英題なし)。1954年。チャールムクラン劇場。16ミリ、カラー。同タイトルでの第二回目の映画化版であり、大変貴重な作品。1940年に第一回映画化版(35ミリフィルム、白黒)が制作されているが残存していない。チュート・ソンシー監督作品の1977年版は、日本においても名作として話題になったが、近年の2014版も含めて。歴代監督の作品を比べてみるのも興味深い。ただしこの1954版は画像がかなり劣化しているので、新しく画像処理の必要がある。加えて、最後にヒロインが主人公男性を追って沼の中で短刀自害を図る名場面の前でフィルムデータが切れている(58、35分)。フィルムアーカイブ外部でのオリジナル16ミリフィルムの存在を筆者も模索したが、力及ばなかった。既に破損散逸している可能性は大であるが、発見できればビッグニュースになるであろう。ぜひともに発見してほしいものである。ちなみにチュート・ソンシー監督版が新たにデジタル処理され画像がきれいになった最新バージョンが同館にて2018年9月20日限定で有料上映されている。

「แสนสับ (セーンセーブ)」(英題なし)。1950年。チャールムブリー劇場。16ミリ、白黒。「傷あと」の原作者と同じマイ・ムアンドゥームの小説作品の映画化。残念ながら1950版はアーカイブにないが、1994年版が所蔵されており、「傷あと」のストーリーと比較してみるといい。構成・展開ともほぼ同じだが、こちらはハッピーエンドで終わる。

「ชั่วฟ้าดินสลาย (天地果てるまで)」(英題: Forever Yours)。1955年。ニューオーディエン劇場。35ミリ、カラー。文学作品をもとにした映画で内容も重厚。画像処理を施したDVDが当館で販売されており、チャリダー所長の推薦映画。2010年版映画と比較するとかなり趣きが違う(2010年版は、拙稿「ノラの如く、自由を求める: 『天地果てるまで』ヒロインの飛翔と失墜」(山本博之・篠崎香織編『たたかうヒロイン 混成アジア映画研究2015』所収)を参照されたい)。

「บ้านทรายทอง (サーイトーン邸)」(英題なし)。1956年。チャールムクラン劇場。16ミリ、カラー。89分。アーカイブに保存されているのは、同館広場で1997年に野外上映された際の音源。男性一人・女性一人が声色を変えて色々な役をこなしている。観客の笑い声も録音されている。文学の名作の映画化で、今まで何回も映画化テレビドラマ化されてきた大人気作品の記念すべき初回映画化版。ヒロインは「サンティ・ウィナー」のヒロインを演じた女性で、美しく演技も際立っている。

・タイ映画版「マダム・バタフライ」は、プッティーニの「Madama Butterfly」の内容をある親王がバンコクの士官とチェンマイのヒロインの話に置き換えてタイ風に翻案した文学作品を映画化したものである。タイ語原題は「サーオ・クシアファア」(สาวเครือฟ้า)と言って、クシア嬢といった意味である。初回の映画化は1934年で英語タイトルMadame Butterflyが付され、二回目は1953年で英題は付されていない。初回の1934年版16ミリフィルムは散逸して所蔵なし。1953年版は著名なテー監督で、16フィルム自体は残っていないが、映画制作の舞台裏を記録した小片が残っており(2、57分)、当時のバンコクの洪水などの同監督による他のドキュメンタリー小品とともに一枚のDVDに収められて当館で販売されている。

ここでタイ映画史における「弁士」(タイ語で‘ベンチ’)の役割について解説しておきたい。今回筆者が知れた範囲では、日本で映画をみたタイ人が、帰国後タイの映画館で弁士システムを導入した。当初は舞台の前方のスクリーン近辺で制服を着た一人の「弁士」が、日本と同じようにサイレント映画に声を被せて解説していた。その後、男性の声役・女性の声役の二人が館内後方に位置取るようになり、観客には見えなくなった。以後2～3人が同じく後方に位置し「ナック・パーク」と呼ばれるようになった。日本人が考える弁士に最も近いのは最初期のものであろう。それ以降の「ナッ

ク・パーク」は、日本でいうところの「吹き替え」の声優役に近い。ただしその場の雰囲気や様々なアドリブを加えるのは、もちろんである。現在のタイのテレビドラマの吹き替えも固定した数人のメンバーで構成される一つのチームが担当する（ちなみにチームの種類は数えるほどしか存在しないので、どの外国テレビ番組も同じ声優の組み合わせとなる）。

初期の「弁士」は、タイの伝統仮面劇（コーン）で行われるナレーションを模してサイレント映画の解説などを行っていたが、時ほどなくして外国のトーキー映画のセリフ部にタイ語のダイアログを被せるようになった。西洋映画の「マダム・バタフライ」が後者の最初の例らしいが、原版フィルムは残っていない。筆者はタイでのこうした「弁士」スタイルの展開に関して、日本の弁士スタイルと伝統仮面劇のナレーションの融合だけでなく、タイ伝統影絵芝居（ナン・タルン）のナレーションのシステムも融合して発展していったのではないかと考える。映画館だけでなく野外広場で鑑賞されるようになった映画上映はまさに、伝統影絵芝居のスクリーンをそのまま使用して浸透していき、庶民の人気を博した、この見解に関しては、タイ「弁士」についての記事を執筆している当館の前所長ドーム氏およびプッタポン氏とも意見交換を行った。決め手となる当時の資料がまだ発見されていないので、結論を出すまでには至っていない。

タイ映画「マダム・バタフライ」に話を戻せば、第一巻に掲載されている1927～1956年期間中には関連作品も含めると5回以上映画化されているが、アーカイブではいずれも所蔵されていない。ずっと後年の1992年版「クルアファー」（ศรีอภัย)は所蔵されているが、この版は筆者も個人所持している。1953年のテー監督版は、制作舞台裏のドキュメンタリーが残っているくらいだから、オリジナルフィルムの断片もどこかに残っていないか当館スタッフに探索の協力をお願いしたが、現在のところ不明である。

・その他、アーカイブ所蔵の貴重なドキュメンタリー等について紹介しておきたい。

ラーマ7世は「ホームシアター」用としてショートフィルムをいくつか制作しているが、当然ながら劇場公開はされていない。その貴重ないくつかが当館に所蔵されている。代表作は、「มหานิกาย」（魔法の指輪）。1930年。16ミリ、白黒。サイレント、25分。ところどころセリフや場面解説の字幕ショットが挿入されている（保存番号D2-00645）。フィルムにオーストラリア国立大学の文字が出てくるので、そこで保存されていた版であろう。当時はオーストラリアに送られて現像処理をすることが多かった関係か。

日本がタイで制作した「คล้องช้าง」（「象狩り」という日本語タイトルあり。原意は「象の囲い込み」で、野生の象を囲い込んで保護すること）。1938年。35ミリ、白黒。60、40分。全編日本語でナレーションが行われている（保存番号D2-00575）。

スウェーデン制作の「ข้าวกำมือเดียว」（「En Handful Ris」、原意も「一握の米」）。1940年。35ミリ、白黒。69分。ドキュメンタリータッチでタイ北部の少数民族の新婚カップルの生活を描いた秀作である（保存番号D3-00823）。

タイ鉄道の父であるとともに、タイ映画の発展にも大きな足跡を残し当館の庭に銅像も立っているカンペンペット殿下の作品シリーズ。満州からはじまり朝鮮を経て巖島や皇居へといたる日本の当時の風景や、品川の鉄道連結についての詳細かつ専門的なドキュメンタリー（1930年、保存番号D2-01808）。日本のボーイスカウトタイ訪問やタイのボーイスカウト日本訪問の記録もある（保存番号D2-02956）。

2. タイ・フィルムアーカイブについて

(写真 3)

タイ・フィルムアーカイブ（Film Archive Thailand、หอภาพยนตร์）はバンコク郊外のナコンパトム県プッタモントーン郡サラヤー地区に位置する。ナコンパトム県ではあるがバンコク都に隣接したエリアにある（ただし、交通の激しい時間帯はバンコクから2～3時間かかる。付近にはマヒドン大学やスワンスナター大学サラヤーキャンパスなど数多くの大学がある。大学キャンパスが林立する文教地域的な雰囲気のなかで、フィルムアーカイブ自体、技術大学と舞踊大学の二つの大学の間に挟まれた位置にある。タイ国立フィルムアーカイブと記している日本語サイトもあるが、現在は「国立」ではない（今後再び国立にする予定はあるとのこと）。



アーカイブ敷地内には映画博物館もあり、往年や近年の映画セット・小道具などが展示されている。日本でもお馴染みの映画『愛しのゴースト』で使われた仮面も展示されている。当館に保管されているタイ映画作品が視聴できるのはチュート・ソンシー図書・視聴覚室という建物である。著名な映画監督チュート・ソンシーの全面的な協力を得て造られたため監督の名を冠している。現在は薄暗いプレハブの小さな部屋であるが、同じ敷地内に立派な新建物が完成間近で来年には移動予定とのことである。ただし、当施設は研究目的の利用者の便宜を図ることを第一とし、遊び目的の人が長時間寄りつくことがないように、今後もあまり快適な設備にはしない予定ということであった（いまと同じように固い椅子であると残念である。毎日長時間座っているのはかなりの忍耐が必要であった）。チュート・ソンシー図書・視聴覚室には充

実した図書資料もあり、タイ映画に関する修士論文もタイ国中から集積しており、タイ映画研究を志す者には極めて有益な場である。

フィルムアーカイブでの調査においては、資料担当の係員が一人のため所用で不在の場合も多く、実際の開室状況に注意が必要である。一作品ごとに担当者に確認してもらい、保管場所からとってきてもらうという手順のため相応の時間を要した。ただし、2018年9月6日より新システムが導入試行され（video on demand）、担当者の手を煩わせる必要性を大幅に削減して映画資料調査ができるようになった。筆者が新システム利用者第一号とのことである。現在、新システムはあくまで試行中とのことであり、公表はもう少し後になるとのことである。いずれにせよ公表後であっても、当館のみで視聴可であり外部からの映画作品へのアクセスはできない

新システム導入のおかげで効率が格段と上がり。筆者は帰国前の一週間で第一巻所収作品以降である1957年より現在に至るまでの映画作品の所蔵状況をすべてチェックすることができた。ただし、一個一個の作品の全編を視聴したわけではない。著作権の関係であろうか、特に70年代以降の作品であれば、当館のオンデマンド所収作品数より、筆者が個人的に所有している作品数のほうが多いことが判明した。

3. フェローシップ活動記録

今回のフェローシップでは、基本としてフィルムアーカイブにおいて映画資料調査を行った。その他にシンポジウムでの発表や監督訪問を行った

フェローシップ活動内容の全般的なアドバイスは、受け入れ先であるチュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科ナムティップ・メータセート博士よりいただいた。ナムティップ氏が実行委員長を務める大学でのシンポジウム（タイ国日本研究国際シンポジウム2018、8月25日）で発表を行い、文学部門の一つのセッションの司会も担当した（註：無給）。

フィルムアーカイブにおいてはチャリダー所長（2018年9月1日付けで現職）、サンチャイ副所長よりご指導いただいた。また特別アドバイスをドーム氏（前所長・現相談役）よりいただいた。さらに調査中に当館で、パリ第3大学（ソルボンヌ）大学にタイ映画に関する博士論文を提出して間もないAliosha Herrera氏と知り合いになり、氏より博士論文HISTOIRE DU CINÉMA THAÏ DE 1945 À 1970 : L'ÈRE DES FICIONS POPULAIRES EN 16 MMをいただき、今後の研究に大変資する幸運を得た。加えて、当館で定期的に行われる映画行事に出席したり、帰国前最終週にはショートフィルムフェスティバル（Thai Short Film & Video Festival, 8-16 September 2018）が当館で始まり、参加して映画関係者と広く交流したりすることができた。

4. フェローシップ活動を終えて（今後の予定）

混成アジア映画研究会のホームページ中の作品紹介欄で、本フェローシップで調査した個々の映画作品の紹介を今年度中にする予定である。もし何らかのバジェットが獲得できれば『タイ国フィルモグラフィ第一巻』の全訳も考えている（翻訳に関しては発行所であるフィルムアーカイブのチャリダー所長了承済み）。来年度以降は、作品分析を行った上での論文執筆や、国際学会での発表を予定している。

本プロジェクトで得た映画情報に関しては、既に大阪大学外国語学部タイ語科の授業ゼミ（タイ文学演習）で使用しているが、今後も継続して利用する。

写真1：タイ・フィルムアーカイブにて

Film Archive Thailand、หอภาพยนตร์

94 Moo 3 Phutthamonthon sai 5 Phutthamonthon Nakornpathom 73170

<http://www.fapot.org/en/home.php>

写真2：フィルムアーカイブの商品袋にも使用されているタイ最初の劇場公開映画 โชคดีสองชั้น (Double Luck) のデザイン

写真3：チュート・ソンシー図書・視聴覚室での作業の様子